

編集室から

今年も早いもので、師走号をお届けする時期となりました。

この時期、山は冬支度に忙しくなります。柚子は収穫。梅の木は剪定と植え替え。週末が晴れてくれれば捗るのですが、あいにく北陸の天候は気まぐれ。雲間を掻い潜って出かけてゆきます。この時期に手間を掛けておかないと、春先の花の時期に影響しますので、晴耕雨読と決め込むわけにも参りません。

いそいそと出かけて先日、うっかり転んでしまいました。両手に道具を抱えていたので、頬骨の辺りから地面につんのめり、いささかすり傷を作ってしまった。幸いきわめて軽症で済んだため、翌日の岐阜県郡上市で開かれた経済産業省中部経済産業局・郡上市商工会主催セミナーでの基調講演は事なきを得ました。

先日、太平洋側からお越しいただいた方が、北陸の目まぐるしく変化する天候に、いたく驚かれておられました。曰く「弁当忘れても、傘忘れるな」朝晴れていても、日中・夕方どうなるか判らない北陸の冬空。嬉しくはありませんが、これしき平気で過ごす北陸人の姿に改めて感じられる処があたりだったご様子でした。

雨がちで、気温も低くなるこれからの季節、皆様も怪我などには、お気をつけ下さいませ。

さて、今月号からしばらく秋田の上村さんが事情によりしばらくお休みされます。代わって以前レギュラーをお願いしていた江川さんに書いていただくことになりました。既に時効でしょうからと、前職で大変なご苦勞をされたお話を綴って頂く事となりました。

成功話は何処にでも紹介されます。しかし、困難に直面したなかでの苦節話は、中々表に出ないのが、この国。夢中で駆け抜けられた「その時」にこそ、今日の大変革の時代に学ぶべき点が少なくはないと思います。(は)



このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。



2011/12
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

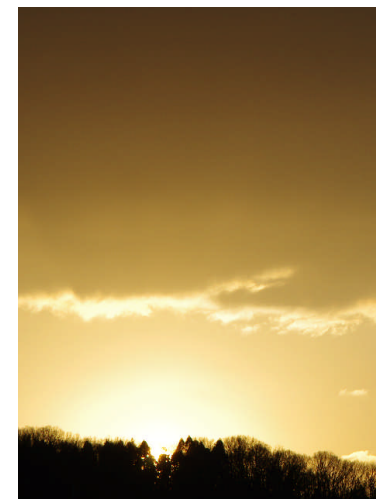
〒920-1167
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217
Fax 076-233-7375
Email usric@neting.or.jp



2011/12
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

師 走



師走の日の出：弊社から
by hama

寄稿 『地域づくり支援担当として』

栃木県地域振興課 副主管 大森 豊

昨年度まで産業廃棄物処理施設の許認可を担当し、この春『地域づくり支援担当』に配属となりました。これまで、内部管理が多かったので、「地域のために働く」今回の異動をワクワクした気持ちで受け止めておりました。メインとなる業務は、「わがまち協働推進事業」という、市町村と住民とが協働して行う地域づくり活動を財政的に支援する事業です。事務を引き継ぐため、昨年度までの状況を聴いているうちに、「???」との思いがムクムクと。なんだか手続きが面倒くさそう。その上、採択要件が意外とたくさんある。制度の根幹に関わる要件の緩和はすぐにはできなかったけど、とりあえず、省ける手続きはそぎ落とし、いざ、年度当初の市町担当者説明会へ。・・・何でこの人達はこんなに無表情なのだろう。地域をより良くするための担い手がこんなに集まっているのに。こんなことで、「協働」なんてできるのかな。・・・

その後、事業に関する問い合わせも、お互いに行き来することも無いまま、それなりの時間が経過しました。言い訳がましいのですが、前向きな仕事ではないのだけれど、やらなければならぬ仕事が結構あります。これまでの職歴で、重たい懸案事項を処理してきたというレッテルが貼られているのか、どこへ異動しても、そうした業務が用意されています。しかし、そんなことにかまけていても、市町との関係の好転は期待できませんから、負の業務はちやっちやとこなし、「とりあえず仲良くなるう。」を目標に、市町の役場巡りをさせていただきました。

テーブルに着いた時には、「またお会いしましたね。」と心の中で言いたくなるような市町職員の方の無表情な顔。これまで私達が何をしてしまったのか聴かせ

ていただきたい、今後は皆さんが良い成果を上げるための一助となりたい、仲良くなりたい、そんなことを身振り手振りを加えながら話をしていたら、徐々に表情が柔らかくなり、話も盛り上がってきました。

言うだけなら容易いこと。実践をすぐ示さないと本当の信頼は得られない。とは言え、今の自分には十分な資質が備わっていない。こんなことを考えながら思い立ったのは、「いろいろな場面に身を置いてみよう。」ということでした。県外で行われる研修等に顔を出し、面白そうな人に近付き、面白い情報をいただく。いただいた情報をうまく使ってくれそうな身近な人のところに行って伝えてみる。思った以上に感謝されたり、個別の事情の違いを教えてもらったり。そんな状況をまた別の場面の面白い人に話してみると、自分には無い糸口をいただけたり、人を紹介していただいたり。今のところ、もごも動いているだけではありませんが、「借り物競走」から「薫しべ長者現象」へと好転しています。

情報は一方的にいただくだけではなく、こちらからも発信して、相互に享受し合うことが健全だと思っておりますが、私の周りを見ていると、最初の有力な武器が無いことで、出て行けず引きこもってしまう人が大勢いるんですね。

私の場合、最初は「か細い藁」として、「いかに今の行政が周囲の期待に応えられない体質になってしまっているか。」なんてものを手に携えて臨む図々しさがありません。自分に課したタイムリミットは、残り半年。信頼のおけるプロの県職員となれるよう、もがき続けてみようと思っております。



【プロフィール】

（おおもり ゆたか）平成元年入庁。財政、障害福祉、行革、産廃を経て、現職。中々大学で陸上部、現在もマスターズ陸上に出場。小々大学で合唱、最近も第九や病院での歌のボランティアに参加。

濱のつばやき 『国を超えて』

この九月から、米国西海岸のポートランド州立大学に、娘が一年間の留学を始めた。車社会の米国には珍しく公共交通整備の進んだ都市であることから、仕事柄それなりの知識は持っている。三十数年前、札幌で通った高校は、ポートランドの高校と姉妹提携しており、毎年交換留学生が来ていた。親子二代のご縁があるが、自分自身は彼の地を訪れたことが無い。海外に娘を一人で住まわせる訳だから、心配でないはずが無い。ところが、フェイスブックで時折娘の消息が知れる。数行の記事が更新されていて、口語英語なので、何のことも良く判らない。メールやメッセージが届いても、必要最小限の手続きに関することがほとんど。

ところが、一緒に留学している同学生たちが日々撮影した写真に娘が写っていると、こちらにも通知がある。写真に「タグ付ける」という機能なのだが、友人たちが自主的に写真を上げ、娘をタグ付けしてくれることで、親元にも同時にそれが届く…。なんと

も親孝行な友達システムだ。

自分が学生の頃、携帯電話は世の中に存在さえしていなかった。公衆電話から親元に連絡することはほとんど無く、まして手紙など書いた覚えはない。同じ国内とは言え、どうしているか案ずるのが親心というもの。若気の至りで、そんな事には頓着せず鉄砲玉だったなあ。

そんな自分に似たと思えば、少々の音沙汰なしも致し方無い。むしろ、わずかな音信にいささかの謝辞が入っている辺りは、かつての自分よりも好しとすべきか。

野口英世の母は会津の里から、帰ってきてほしいと懇願するひらがなの手紙を残している。維新から昭和初期、母国を背負って海外留学した先人と、その家族の思いは如何ばかりだったか。その頃に思いを馳せると、この短期間に隔世の感がある。

物理的には遠く離れていても、情報は瞬時に交換できる。親にとっては有り難く、便利な世の中になると、つくづく感じている。

「浮草の如く」と題して、2002年7月から約3年間、本誌に25編を連載させて頂いた。このたび今号から3回に渡って誌面をお借りし、その後の6年間のうち最も浮草っぷりが激しかった前職のとある時期についてご紹介したい。

2005年7月、中部支社長から突然の電話があり、大阪勤務だった私は、急遽、のぞみで東に向かった。6月に出るはずの賞与、そして取引先への支払いが遅延するという事態の中、中堅のリーダークラス3人が東京で秘密会議を行うのでそこに参集しろとのこと。後で明かされたのだが、ひとクラス落ちる私が呼ばれたのは“銀行で勤めたことがある 1から”である。我々は当時得られたわずかな手掛かりをもとに一つの結論を得た。「このままではつづれる。ソフトランディングはない。今の経営陣では乗り切れない。」

当時の経営陣、株主との息詰まる攻防を経て、8月末の株主総会にて秘密会議メンバー全員を含む5名の新取締役就任が決まった。それと同時に、頼みの綱であった外資系金融機関からの融資がドタキャンされ、借入先への返済が全て不可能になった。そこから10/26の民事再生手続き申立に至るまでがまさに地獄。本社の玄関に銀行の行列ができ、“銀行に勤めたことがある”私はほぼ全ての金融機関対応を行った。この時期私は損益計算表と貸借対照表を、この最も過酷なオンザジョブトレーニングにてマスターした。

最初に相談した弁護士は「綺麗に破産しろ」の一点張り。「破産=会社の精算」であり後には何も残らず、散り際の美しさは罪のない社員にとって何の価値もない。我々は破産処理の書類を脇に抱えつつ 2、別の道を模索した。「本業に全く関係のない投資の失敗が債務超過の原因。社会に貢献する本業では立派に利益を出している。民事再生手続きにより会社再建を果たすにふさわしいモデルケースである」との思いがけない言葉と、「困難な道のりだが代理人として手続きを支援する」という力強い言葉をかけてくれた弁護士集団に出会った。光を見出した瞬間である。

民事再生手続きは、申立からほぼ1年後の10/20に全て終結した。この間、上述以外にも多くの分岐点があり、出会いと別れがその感傷に浸る間もなく連続して訪れた。資金繰り、不良債権売却、社員採用・退職・リストラ、旧経営者責任、会社改革、M&A、国税査察、発注者・外注先対応、金融機関対応...。会計、税務、法務、人事、経営の素人である新経営陣が乗り切れたのは、専門家の支援と社員の信頼のおかげであるが、精神に異常を来たことなく精力的に立ち向かえたのは、奇跡としか言いようがない。(次号に続く)

- 1：地方銀行の子会社で2年半、銀行本体で半年間勤務したが、いわゆるシンクタンク業務しか行っておらず、銀行員としての知識・経験は乏しい。
- 2：後は裁判所に持っていきただけでいつでも破産ができる状態だった。

11月25日の金曜日朝起きて、パソコンを立上げメール読み込みの間にヤフーのトピックを見ると日課の中で、衝撃の文字が目飛び込んできました。それは『彼氏・彼女いないが過去最高』です。

何が衝撃だったかというと、確かに過去最高という字面もそうなのですが
定点観測でこんな調査データが存在していたこと

~調査サンプルになったことはないなあ。

調査主体が国の独立行政機関でもある、人口問題研究所がやっていること

~てっきり、どこかのお見合い会社がPR戦略でやっているのだと思いましたが、国がやっているではないですか!

簡単に結果をまとめますと

18歳~34歳の男女1万人をサンプル(有効回答数は7200)

彼女・彼氏がいない比率

・男性61.4%(前回調査対比9.2%増)

・女性49.5%(前回調査対比4.8%増)

となります。

晩婚化・少子化という結果だけでなく、その前提にあるこの部分を何とか解決しないといけないともあり人口問題研究所の調査主任の方のコメントでは「見合い文化の衰退が影響している」ともありました。果たして、それが根本的問題なのでしょうか?実は、うちのお店でも確かにお客様との会話の中で『大将、誰かいい女性(男性)を紹介してよ』と頼まれることが非常に多いです。特に30歳~40歳代にその傾向が強いのです。それも皆さんちゃんとした会社で働き、安定収入もある方達ですよ。

笑顔の地域づくり、強い日本の再生をライフワークとする私としては、何か草の根から問題解決に取り組まねばと思い、先日11月12日に独身のお客様を集めた大合コンを当店で開催しました。男性17名、女性15名の貸切による企画です。女性は「こんなきれいな方に彼がいないの!!」、男性は「こんな人気企業に勤めているのに!」という方ばかりです。結論から言いますと、たいして盛り上がることなく失敗に終わりました。原因をあくまでも私見レベルで検証すると「口で言うほどの危機感のなさ」につきます。

つまり、男女ともに何ら具体的行動を起こさないわけです。東京に限った事かもしれませんが、周囲にはまだ独身の同僚や先輩がたくさんいますし、パートナーがいなくても楽しめる場・事が豊富に存在し、これだけ人がいるからいつか何とかなるだろうという甘えもあるのかも知れません。ですが、地方はそんな訳にはいきません。地域コミュニティとの関係づくり、家業の継承、両親の介護等においては家族を持つことに対する危機感は相当異なるでしょう。能登にいる私の友人でも40歳にして、まだ独身の男性・女性がたくさんいます。皆さん必死でお見合いやイベントに参加しています。しかし、ベストまではいなくてもベターなマッチングがないそうです。ですが、にじみ出てくる危機感やその行動力は前述した東京の方達とは違います。(恋愛においてはそれが逆効果という時もありますが。。。)一口に彼女・彼氏いないが過去最高と言われても、その問題に対する実態は様々なのでしょう。

もっと述べたい事は五万とありますが、この調査に対する私の見解をまとめますと

・地域格差、世代論をつづさに見る必要がある。今は40歳代に独身のボリュームゾーンがあることも忘れずに。

・将来の社会保障問題をはじめとした未来に対する危機感を国としても国民にもっと提示すべきだし、子供がいる家庭と独身では保障サービスに差を設けるべき。批判もあるでしょうが、強い国づくりには必要です。

・あと草食、肉食なんて安易な言葉で世の中を評して問題をライトにしてしまうのはやめましょう。そんなもの今も過去も同じです。

生きるために、未来をつくり継承していくために人がすべきことに肉食も草食もありません!!ただ戦うのみです!!

というまともや強権的な発言になってしまいました。

『富士の国から ~大魔神のたび~ 』

阿蘇のたび(その1) 静岡県職員 溝口 久

私が勤める静岡県中部地域支援局は、藤枝市にあり志太榛原地域の地域振興の支援をしている。ここに富士山静岡空港がある。開港二周年を控え、順調に便数、乗客数も伸びていくことを想像していたが、3・11震災後の落込みが厳しく、特に熊本便の搭乗率は地を這うようで、風前の灯になっていた。個人旅行も含め熊本に行くようにとの指示もあって、管内の市町職員を連れ立って10名の視察団を組み、5月18日から3泊4日で阿蘇に向かった。阿蘇くじゅう9市町村が一体となって開催している「阿蘇ゆるっと博」への視察研修を企画したのだ。

博覧会につきもののパビリオンはなく、商店街、田園地帯、村なか、温泉場、山などいたるところのエリアをパビリオンと称している。各々のエリアで実施しているグリーンツーリズム、タウンツーリズム、エコツーリズムなどによる着地型の多彩なプログラムの魅力を体験する観光が「阿蘇ゆるっと博」だ。

この体験型観光を体験を通して学び、さらに着地型旅行を組み立てるコンシェルジェの仕組みを調査研究し、我地域の広域観光の展開の参考にするということというのが研修の趣旨だ。

1日目は、阿蘇ゆるっと博(阿蘇地域広域連携プロジェクト)の事務局になっている阿蘇地域振興デザインセンターの坂元事務局長のお話を伺い、その日は14年前小国町で開校した「九州グリーンツーリズム大学」の同期生の河津慶子さんが経営する農家民泊「さこんうえの蛙」に泊まった。

2日目は、産山村「たじりめぐり」という村内の散策ツアー、午後は「内牧温泉商店街食べ歩きツアー」。宿は内牧温泉「ZENZO」。

3日目は、エコツーリズムを体験するため、阿蘇中岳トレッキングツアー体験を予定していたが中岳噴火により、ハードな登山コースに変更した。下山後すぐに阿蘇神社及び奇跡の再生をした門前商店街の散策ツアー。最後の泊りは宿坊「阿蘇」、ここの主人の来る人を楽しませずして帰らせないエンタイナーぶりには敬服した。

さて、この研修ツアーの中で皆様にお伝えしたいところを紹介することにする。

グリーンツーリズムという言葉が日本で使われるようになって20年ほどになる。農業収入に観光収入を加えることで農家の生計を成立させるもので、欧州では離れを滞在できるように改造し、一週間単位で貸すことが盛んに行われている。お客は自炊または、近くの農家レストランに行く。そこを拠点に観光したり、ゆるりと思いつきの時を過ごす。

日本での滞在型グリーンツーリズムは九州が盛んだ。私は大分県宇佐市安

心院の中山ミヤ子さん宅が行きつけの農家であり、今回はじめて河津さんの「さこんうえの蛙」に泊まることにした。小国町中原にあり、今年で開業13年目。家族3人で経営。受入は10人程度である。

セルフサービスが基本。お風呂はなく、町営の銭湯(車で4分、1人200円)を利用。トイレは水洗式で新しく、清掃は行き届いている。リピーターが多く、神奈川や北海道からも訪ねてくると言う。普段は都会に住んでいて、ここに安らぎを求めに来ると言うわけだ。

農家民泊は農家が副収入を得ることが前提だから、人を雇ってまでするものではなく人手がないため、セルフサービスが多くなる。宿によっては食事づくりから風呂焚きまで一緒に作業をするところもあり、擬似家族的な対応がウリにもなっている。ここが旅館に泊まることとの圧倒的な違いである。

ただし、農家民泊業が専業になると、かつての民宿になっていく。今、民宿は廃れる一方だ。旅館やホテルの宿泊料金が下がり、大きな価格差がなくなっている。そうなれば設備、サービス、素人の料理の民宿が太刀打ちできるはずはない。

一軒の農家民泊が地域の経済を向上させるとまではいくとは考えられにくいだが、農村に観光という手段で都市の力を注入する意味は大きく、このことで心豊かな暮らしづくりを実現し、それが周囲に伝播しムラに住む自信にもつながるように思える。

「さこんうえの蛙」の売上げは360万円程度(年間約600人×6,000円)。年に1回はヨーロッパに研究旅行に行っているとのこと。そこで学んだことを活かし、例えば、トマトは旬のときだけに限らず加工して保存の効くものにしてピザ他に使用して年中使えるものとしている。

参加した者からは、「本当にここに泊まるの。」という引いた感じを受けたが、「何故か、ホットする、昔ながらの田舎の民家という雰囲気がありました。」との声を聞き安心した。旅は始まったばかりだ、まだまだみんなが見たことも聞いたこともなかったものが続く。(つづく)

